HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	分詞および関係詞によるコリャーク語関係節の相補的形成
Author(s)	呉人, 惠
Citation	北方人文研究, 1, 19-39
Issue Date	2008-03-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/34538
Type	departmental bulletin paper
File Information	KUREBITO.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

分詞および関係詞によるコリャーク語関係節の相補的形成

呉人　惠
富山大学人文学部

1. はじめに

関係節の類型論的研究は、近年、急速に発展しているが、これは、関係節を英語のような限られたタイプの言語だけを対象とした狭い分析の枠から解放し、より広範な諸言語のデータに照らして多様なタイプを洗い出し、普遍的な統語理論を構築する方向性をもって進められている。このような方向性を支える関係節の定義は、たとえば、Comrie（1981: 136）に見られる次のようなものである（訳は筆者による）。

> 関係節は、必ず主要部と制限節からなる。主要部は、それ自身、ある可能な範囲の指示対象を持ち、一方、制限節は、構造全体の実際の指示対象について真であるべき命題を与えることによって、その範囲を制限する。（Comrie 同上）

このように関係節を機能的に捉えるならば、①関係節における動詞の形式としては、定形動詞型と非定形動詞型、②関係節化される位置の標示方法としては、非縮約型、代名詞残存型、関係代名詞型、空所型、③主要部名詞と制限節の位置関係としては、主要部後方型、主要部前方型、主要部内在型など、様々なタイプが関係節として認定されうることになる。

さらに、これらのタイプは、主語＞直接目的語＞間接目的語＞斜格名詞＞所有者名詞＞比較対象という接近可能性階層（Keenan and Comrie 1977）と呼応しつつ、それぞれの言語に特有な関係節のシステムを形成しているといえる。

本稿は、このような言語類型論の理論的枠組みに照らしつつ、シベリア北東部に分布するチュクチ・カムチャツカ語族の１つコリャーク語（チャヴチュヴァン方言）の関係節に関して、体系的な記述をおこなうことを目的としている。具体的には、コリャーク語において、分詞、関係詞（関係副詞・関係代名詞）という２種類のストラテジーによる関係節が、最下位の比較対象は別として、おおよそ接近可能性階層に従い、相補分布的にその機能を補完し合いながら形成される様態を明らかにする[1]。

1）　本稿は、平成 19 年度文部科学省科学研究費補助金（基盤研究Ｂ［海外調査］）「危機に瀕した古アジア諸語の系統的・類型的多様性に関する調査研究」（課題番号 19401020、代表：呉人惠）による現地調査（2007 年 8 月ならびに 2007 年 12 月～ 2008 年 1 月）で筆者が得た一次資料に基づいている。調査に

2. 分詞による自動詞主語・他動詞目的語の関係節化

コリャーク語には、「行為者名詞 imya deyatelya」(Zhukova 1972: 137) を形成するといわれる接尾辞 -lʔ がある。この接尾辞は、名詞、形容詞、副詞、動詞語幹に接続して「〜をもつもの」「〜の性質をもつもの」「〜するもの」などの意味を表わし、名詞として単独で用いることができる。このうち、-lʔ が動詞語幹に接続した場合には、分詞的に主要部名詞の指示対象を制限する制限節となり、過去あるいは現在時制の関係節を形成することもできる。

-lʔ の統語的機能の広範さ、意味の多様性については、すでに Zhukova (同上) でも指摘されている。また、同系のアリュートル語については、トコロ性の度合いに基づき、所有・存在を表わす他の形式と比較した詳細な考察が永山 (2004: 45-78) に見られる。ただし、-lʔ が関係節を形成する際の特徴については、管見の限りアリュートル語に関する記述だけで (Kibrik, Kodzasov and Muravyova 2004: 327-332)、コリャーク語に関するものは、Bogoras (1922: 717-718) のきわめて簡略な記述以外には見られない。

一方、これもまた従来、指摘されることがなかったが、未来時制を表わす関係節の形成には接尾辞 -lqəl がかかわっている。この接尾辞は、通常、名詞、動詞語幹 (動詞の場合には -jolqəl の形式) に接続して「〜の予定のもの」「〜する予定のもの」を意味する名詞を形成するが、その一方、動詞語幹に接続して未来時制の関係節を形成する。

-lʔ と -jolqəl はその形態的・統語的ふるまいが類似しており、関係節において、前者は現在・過去、後者は未来を表わすものとして相補分布的に機能していると考えられる。そこで、以下ではまず、-lʔ と -jolqəl が形成する関係節の特徴を記述するとともに、これに類型論的視点からの位置づけをおこなう。

なお、以下では上述の Comrie (1981: 136) の定義に基づき関係節を論じるが、その際、便宜的に -lʔ による関係節全体を「LH 関係節」、このうち、主要部名詞を制限する節を「LH 制限節」、その制限節の中で -lʔ が付加された動詞の部分を「LH 分詞[2]」と呼ぶ。-jolqəl も同様に「-JQ 関係節」「-JQ 制限節」「-JQ 分詞」と呼ぶことにする。また、これらと区別して、単に名詞として用いられる場合は、「LH 名詞」「JQ 名詞」と呼ぶ。

2.1. 現在・過去時制を表わす LH 関係節

2.1.1. -lʔ の形態的特徴

LH 関係節について論じる前に、まずは -lʔ が名詞として働く場合の形態的特徴を概観しておきたい。

-lʔ は、上述のとおり、名詞、形容詞、副詞、動詞語幹に接続して名詞を形成する。名詞語幹に

あたって、コリャーク語に関する貴重な情報を提供していただいたアヤトギーニナ・タチヤーナ・ニコラエヴナ氏 (1955年、マガダン州セヴェロ・エヴェンスク地区ミルカワジャム生まれ、女性) には、この場を借りて心より謝意を表したい。

2) なお、コリャーク語の LH 分詞は名詞と同様の語尾をもつことから形態的には名詞として認定できるが、動詞と名詞修飾の役割を併せ持つという機能面に着目して、本稿では「分詞 participle」と呼ぶものとする。ちなみに、後述のように、LH 分詞は LH 名詞に比べると、取りうる格が限られているなど、純粋に名詞とは呼べない側面をもっていることにも注目されたい。

接続すると、その名詞の意味する対象を所有するもの（派生的な意味として、身につけたもの、乗用とするもの、居住地とするものなど）、形容詞や副詞語幹に接続すると、それらが表わす性質や状態を有するもの、そして動詞語幹に接続すると、その動詞が表わす動作の主体あるいは対象を表わす。いずれも、形態的には、格・数・有生性・人称の区別を持つ名詞としてふるまい、人や動物などの有生物のみならず、トコロ性の低い無生物を表わす（永山 2004）。以下は、-lʔ が（1）は名詞語幹、（2）は形容詞語幹、（3）は副詞語幹、（4）は動詞語幹にそれぞれ接続した例である。例はすべて、語尾に名詞の絶対格単数を標示する -n が付加された形である。

（1）walalʔən「ナイフを持った人」　pəlakəlʔən「ブーツを履いた人」
　　ɣekeŋəlʔən「トナカイ橇に乗った人」　Pojtəlʔən「ベルフ・パレニの住民」
（2）mejŋəlʔən「大きなもの」　ketɣulʔən「強いもの」
　　ŋujlʔən「弱いもの」　iwlelʔən「長いもの」
（3）janotalʔən「先頭のもの」　javalʔən「後ろのもの」
　　manaŋəlʔən「ばらばらなもの」
（4）a. jetəlʔən「来る人」　acacɣatəlʔən「笑う人」
　　b. tejkəlʔən「作られたもの」　təməlʔən「殺されたもの」

ここで（4）の動詞語幹に付加される例に注目したい。（4a）は自動詞語幹に付加された例で、この場合には主語を表わす。一方、（4b）は他動詞語幹に付加された例で、この場合には目的語を表わす。このことから、-lʔ は能格的にふるまうことがわかる。

ちなみに、コリャーク語は格組織において能格型を示す言語である。すなわち、自動詞主語と他動詞直接目的語（以下、他動詞目的語）は同じく絶対格をとり、他動詞主語はこれとは別に能格をとる[3]。このような能格性が LH 関係節にも反映しているのである。以下では、この（4）と同様の動詞語幹につくタイプが、分詞として主要部名詞を制限し関係節を形成する際の特徴について記述していく。

2.1.2.　LH 名詞と LH 分詞の違い

上述のように、-lʔ は名詞としてだけではなく、関係節を形成する際にも分詞として用いられるが、LH 名詞と LH 分詞にはその形態的・統語的ふるまいに明確な相違が見られる。

まず、LH 名詞は単独で用いられうるが、LH 分詞は必ず主要部名詞を伴う。このことは、上述の Comrie（1981: 136）の関係節の定義にもかなっている。次の（5）は語彙化した LH 名詞の例、（6）は自動詞語幹[4]に接続し、主要部名詞を伴って、制限節を形成している LH 分詞の例である。LH 分詞自体には時制のマーカーがつかないが、wucin ɣivik「今年」という連用修飾句があることにより現在時制を表わすことがわかる。なお、以下、例文における制限節は［　］で明示するものとする。

3）　ただし、能格専用の標識をもつのは人称代名詞のみで、その他の名詞はその有生性の度合いに応じて既存の格、すなわち場所格あるいは道具格を能格として援用する（呉人 2001a: 107–125）

4）　グロスの和訳「教える」では自動詞性が伝わりにくいが、inenɣəjulev は他動詞語幹 {nɣəjulev}「教える」に逆受動を形成する {ine-} が接頭したものであり、主語のみを標示する自動詞活用をする（{　} は、基底形であることを示す）。

(5) inenɣəjulev-ə-lʕ-ə-n kaleja-k ko-vetat-ə-ŋ-Ø.
教える-挿入-名詞-挿入-絶単 学校-処 現在-働く-挿入-現在-3単主
「先生が学校で働いている」

(6) el'ʕa-Ø, [ʕamin wucin ɣivi-k inenɣəjulev-ə-lʕ-ə-n kaleja-k],
女-絶単 間投 この 年-処 教える-挿入-分詞-挿入-絶単 学校-処
ko-lejv-ə-ŋ-Ø.
現在-歩く-挿入-現在-3単主
「今年、学校で教えている女が歩いている」

さらに、LH名詞は、他の名詞同様、様々な格変化をするのに対し、LH分詞は、絶対格でしか現れない。次の(7)は格と数によりLH名詞であるinenɣəjulevəlʕən「先生」が語形変化するパラダイムである。数は絶対格においてのみ単数、双数、複数が区別され、他の格においては数の区別がない。

(7)

	単数	双数	複数
絶対格	inenɣəjulevəlʕ-ə-n	inenɣəjulevəlʕ-ə-t	inenɣəjulevəlʕ-u
道具格	inenɣəjulevəlʕ-e		
処格	inenɣəjulevəlʕ-ə-k		
与格	inenɣəjulevəlʕ-ə-ŋ		
方向格	inenɣəjulevəlʕ-etəŋ		
奪格	inenɣəjulevəlʕ-ə-ŋqo		
共同格	ɣejqə-ʔ-inenɣəjulevəlʕ-ə-ma		
様態格	inenɣəjulevəlʕ-ə-no		
原因格	inenɣəjulevəlʕ-ə-kjit		

一方、LH分詞は、絶対格(単数・双数・複数)以外の格を取ることができない。言い換えれば、制限節内の自動詞主語(8a)あるいは他動詞目的語(8b)にあたる主要部名詞とのみ一致を示す。

(8) a. qajəkmiŋ-ə-n, [ʕamin ajɣəve lejv-ə-lʕ-ə-n tənup-ɣəpəŋ]
少年-挿入-絶単 間投 昨日 歩く-挿入-分詞-挿入-絶単 山-沿
「昨日山を歩いていた少年」

b. ŋajejo jəccət-o, [tejk-ə-lʕ-u]
それら(絶) 糸-絶複 作る-挿入-分詞-絶複
「作ったそれらの糸」

2.1.3. 制限節における主要部名詞の役割

このように、主要部名詞の統語的役割がLH制限節における自動詞主語と他動詞目的語に限られるということは、主語>直接目的語>間接目的語>斜格名詞>所有者名詞>比較対象という接近可能性階層(Keenan and Comrie 1977)に照らして見ると、LH制限節は最上位の主語のうち自動詞主語と2番目の直接目的語という、上位2種類の名詞句しか関係節化できないことを意味する。他

動詞主語については、同じく能格型言語でありながら関係節化が可能な言語の例（バスク語、ワルビリ語、グリーンランド・エスキモー語など）も報告されているが（Keenan and Comrie 1977）、コリャーク語では許容されない。

次の（9a）は、LH 分詞が、制限節内の自動詞主語（単数）にあたる主要部名詞と一致して、絶対格単数を取る例、（9b）は制限節内の自動詞主語（複数）にあたる主要部名詞と一致して、絶対格複数を取る例である。（10a）は他動詞目的語（単数）として働く主要部名詞に一致して、絶対格単数を取る例、（10b）は絶対格複数を取る例である。これに対し、他動詞主語を主要部名詞にした（10a'）（10b'）はいずれも非文である。なお、これらの例の LH 分詞は制限節内に ajɣəve「昨日」があることから、過去を表わすことがわかる。

(9) a. qajəkmiŋ-ə-n, [ʕamin ajɣəve lejv-ə-lʕ-ə-n tənup-ɣəpəŋ]
少年-挿入-絶単 間投 昨日 歩く-挿入-分詞-挿入-絶単 山-沿
「昨日山を歩いていた少年」

b. el'ʕa-w, [ʕamin ajɣəve jaja-k va-lʕ-o]
女-絶複 間投 昨日 家-処 いる-分詞-絶複
「昨日家にいた女たち」

(10) a. kalikal, [ʕamin ajɣəve qajəkmiŋ-a jəlŋ-ə-lʕ-ə-n]
本（絶単） 間投 昨日 少年-能 読む-挿入-分詞-挿入-絶単
「昨日、少年が読んだ本」

a'. *qajəkmiŋ-ə-n, [ʕamin ajɣəve kalikal jəlŋ-ə-lʕ-ə-n]
少年-挿入-絶単 間投 昨日 本（絶単） 読む-挿入-分詞-挿入-絶単
「昨日本を読んだ少年」

b. jəccət-o, [ajɣəve el'ʕa-ta mel'ot-ɣəcɣ-ə-k jəcu-lʕ-o]
糸-絶複 昨日 女-能 うさぎ-毛-挿入-処 混ぜる-分詞-絶複
「女が昨日うさぎの毛に混ぜた糸」

b'. *el'ʕa-Ø, [ajɣəve jəccət-o mel'ot-ɣəcɣ-ə-k jəcu-lʕ-o]
女-絶単 昨日 糸-絶複 うさぎ-毛-挿入-処 混ぜる-分詞-絶複
「昨日うさぎの毛に糸を混ぜた女」

ところで、関係節を形成する非定形動詞に、通常の定形動詞とは異なり、時制・アスペクトや動詞の一致を示す標識が欠如していることは、すでに指摘されているとおりである（Keenan 1985: 160）。また、Keenan and Comrie（1977: 64）は、ドイツ語の分詞による制限節が接近可能性階層の最上位に位置する主語しか制限しえないことを例にあげ、定形動詞よりも非定形動詞の方が制限しうる主要部名詞の種類に対する制約が強いことを示唆している。この 2 つの事実は、恐らく無関係ではない。分詞が形態上、主要部名詞との一致を標示する手立てをもたなければ、主要部名詞の統語的役割を特定できないため、より無標の主語などの上位に位置する名詞句だけが関係節化されうるというのは十分にありえる。特にドイツ語のように格標示の厳密な言語であれば、主要部名詞の制限節における役割の特定に、例えば日本語のように曖昧さの入る余地はない（加藤重広 2003: 208-291）。

コリャーク語では -lʕ は名詞的に用いられた場合、（7）で見たように様々な斜格をとることが可

能である。したがって、もしこの形態的特徴が関係節化においても保持されていたならば、どのような名詞句を関係節化できるかの制限からはもっと自由であってもいいようにも思われるかもしれない。しかし、実際には自動詞主語と他動詞目的語しか関係節化が許されないのは、-lʕ が本来、純粋に動詞を分詞化するだけの機能を持つものではなく、例（4）でも見たように、自動詞の動作主と動作対象という2つの名詞項を表わす接尾辞であるためであると考えられる。

ところで、Comrie（1981: 156）は制限節における主要部名詞の統語的役割がどのように表わされるかというパラメータにより区別した4つのタイプを、最も明示的なものからそうでないものへと、非縮約型＞代名詞残留型＞関係代名詞型＞空所型の順に並べている。制限節の中で、主要部名詞が完全な形で残る非縮約型、制限節の中に主要部名詞が代名詞として残される代名詞残留型、関係代名詞として残される関係代名詞型のいずれも、その方法と程度は違っても、制限節での主要部名詞の役割が明示されるという意味では共通している。一方、空所型では、埋め込み節での主要部名詞の役割を明示するものがなく、その他の3つのタイプとは区別される。

コリャーク語のLH関係節は、主要部名詞の空所を埋める手段を持たない点では、明示度が他の明示型より低い。ただし、LH分詞が絶対格形を取れることにより、主要部名詞の制限節での役割が自動詞主語か他動詞目的語であることを知ることができるため、広義の明示型ともいえる。しかし、さらにそれが自動詞主語なのか他動詞目的語なのかを特定するためには、動詞が自動詞なのか他動詞なのかといったコリャーク語の統語的特性や、文脈などに関する情報を援用しなければならない。

2.1.4. 関係節化の制約を解消するストラテジー

前節で見たとおり、LH関係節は他動詞主語を関係節化することができない。ただし、この制約は他動詞主語を能格から絶対格に昇格させることによって解消できる。絶対格への昇格は、他動詞の自動詞化（逆受動化）を伴うが、これは、他動詞語幹への逆受動化接辞の付加、名詞抱合、語彙的接尾辞、補充法などの方法により実現される。

2.1.4.1. 他動詞語幹への逆受動化接辞の付加

接頭辞 {ine-} は、他動詞語幹を自動詞化するとともに、能格を取っていた主語を絶対格に昇格させ、絶対格を取っていた目的語を斜格に降格させるか、削除する[5]、いわゆる逆受動化接頭辞である。これにより、他動詞の意味上の動作主が自動詞主語となり、関係節化が可能となる。以下の逆受動化によって適格文となった（11a）と、他動詞のままで非文となる（11b）を比較されたい。

（11） a. qajəkmiŋ-ə-n, [ʕamin ine-kmit-ə-lʕ-ə-n
少年-挿入-絶単 間投 逆受動-つかむ-挿入-分詞-挿入-絶単
ecʕolŋ-etəŋ]
裾-向
「裾をつかんだ少年」

b. *qajəkmiŋ-ə-n, [ʕamin ekmit-ə-lʕ-ə-n ecʕolŋ-ə-n]
少年-挿入-絶単 間投 つかむ-挿入-分詞-挿入-絶単 裾-挿入-絶単

5） 他動詞目的語の降格による残存と削除の条件については、現在のところ十分明らかにしえていない。

2.1.4.2.　名詞抱合

コリャーク語では、動詞語幹に、動作主、動作対象、道具、場所、方向、経過域、起点、主格補語などを表わす名詞語幹が生産的に抱合されうる。このうち、他動詞構文において目的語、すなわち動作対象を表わす名詞語幹が他動詞語幹に抱合される名詞抱合では、主語が能格から絶対格に昇格するとともに、動詞は自動詞活用する（コリャーク語の名詞抱合について、詳しくは Kurebito [2001] を参照されたい）。関係節の形成に際しても、この名詞抱合によって、他動詞主語により表わされる動作主を関係節化することが可能になる。

次の（12）は、制限節の他動詞「なくす」が目的語「投げ輪」を抱合することによって、その意味上の動作主である「男」が主要部名詞になっている例である。一方、（13）では、制限節の他動詞「読む」が目的語「本」を抱合することによって、その意味上の動作主である「少年」が主要部名詞になっている。

（12）　ɣəcci　　ʕojacek-a　　ne-ku-ʕeŋev-i,　　[ʕamin　　ajɣəve
お前（絶）　男-（能）　反転[6]-現在-呼ぶ-2単目　間投　昨日
cawat-ə-ntəmŋev-ə-lʕ-ə-n]
投げ輪 - 挿入 - なくす - 挿入 - 分詞 - 挿入 - 絶単
「昨日、投げ縄をなくした男がお前を呼んでいる」

（13）　qajəkmiŋ-ə-n,　　[ʕamin　juleq　ajɣəven'ŋ-a　kale-jəlŋ-at-ə-lʕ-ə-n],
少年-挿入-絶単　間投　長く　晩-具　本-読む-逆受動-挿入-分詞-挿入-絶単
jəqmitiw　　pəkav-e-Ø　　kəjev-ə-k.
朝に　できない - 過去 -3 単主　起きる - 挿入 - 不定
「晩遅くまで本を読んでいた少年は朝、起きられなかった」

2.1.4.3.　語彙的接辞

コリャーク語の語彙的接辞は、接辞でありながら動詞としての実質的･具体的意味を担うもので、さまざまな機能をもつ名詞語幹について出名動詞を形成する。その種類は、①他動詞目的語に相当する名詞語幹に付加される {-u}「食べる、飲む、（野生動物を）殺す」、{-ŋəjt}「刈る、狩る」、{-ŋta}「取りに行く」、{-ŋel}「（主に植物資源について）採りに行く」、{-ɣijke}「家畜トナカイを橇牽引用に捕まえる」、{-ɣili}「探す、捜す」、{-tve}「脱ぐ、外す、剥がす」、{te-..-ŋ}「作る」、②自動詞主語を表わす名詞語幹に付加される {-ntet}「外れる、脱げる」、{-tuje}「ほぐれる、ほどける」、{-juʕ}「（自然現象について）始まる」、さらには、③手段を表わす名詞を語幹に持つ {-lʕet}「～で行く」、{-tku}「～で作業する」、④方向を表わす名詞を語幹に持つ {-jt}「～に行く」などがある（コリャーク語の語彙的接辞の詳細は呉人［2001b］を参照されたい）。

このうち、①の語彙的接辞は他動詞目的語に相当する名詞語幹に付加されると、名詞抱合と同様に自動詞活用をする。それと同時に、他動詞主語は絶対格で標示される。この統語的ふるまいを利用することにより、他動詞主語にあたる名詞を主要部名詞とする関係節の形成が可能になるのであ

6）「反転」とは、他動詞の名詞項が人称によって 1 人称＞ 2 人称＞ 3 人称単数＞ 3 人称複数という階層をなし、高位の名詞項が主語、低位の名詞項が目的語になる順行関係に対し、低位の名詞項を主語に、高位の名詞項を目的語にする逆行化の標識である。

る。次の（14a）では、語彙的接周辞 ta-..-ŋ「作る」を、「屠殺の対象となるトナカイ」を表わす名詞語幹 təmjo に接続することによって、「家畜トナカイ」と「殺す」を分析的に表わす他動詞文では不可能な他動詞主語の関係節化が可能になっている。また、（14b）は qoja「家畜トナカイ」に語彙的接尾辞 -ɣijke「家畜トナカイを橇牽引用に捕まえる」が接続して作られた LH 分詞の例である。

（14） a. ʕojacek-Ø, [ajɣəve ta-təmjo-ŋ-ə-lʕ-ə-n]
男-絶単 昨日 作る-屠殺対象のトナカイ-作る-挿入-分詞-挿入-絶単
「昨日、トナカイを殺した男」
b. ʕojacek-Ø, [ajɣəve qoja-ɣijke-lʕ-ə-n]
男-絶単 昨日 家畜トナカイ-つかまえる-分詞-挿入-絶単
「昨日、トナカイをつかまえた男」

2.1.4.4. 補充法

コリャーク語には異根動詞により自動詞・他動詞の区別をする補充法が見られる。筆者の調査でこれまで確認されているのは、ewjik（自）/ jukkə（他）「食べる」、iwwicik（自）/pələk（他）「飲む」、l'əl'apək（自）/ ɣitək（他）「見る」、jetək（自）/ joʕək（他）「来る」の4対である。（15a）は、「食べる」の自動詞の例、（15b）は他動詞の例である。（15a）では、降格した動作対象が道具格を取っていることに注意されたい。

（15） a. Qeccaj- Ø ənnətʕul-e k-ewji-ŋ-Ø.
ケッチャイ-絶単 魚-具 現在-食べる-現在-3単主
b. Qeccaj-ə-na-k Ø ənnətʕul-Ø ku-nu-ŋ-ə-n-Ø.
ケッチャイ-挿入-有生-能 魚-絶単 現在-食べる-現在-挿入-3単目-3単主
「ケッチャイは魚を食べている」

他動詞文では、主語は能格を取るため関係節化することができないが、対応する自動詞文では主語が絶対格に昇格するため、関係節化が可能になる。

（16） Qeccaj-Ø, [ʕamin ənnətʕul-e ewji-lʕ-ə-n]
ケッチャイ-絶単 間投 魚肉-具 食べる-分詞-挿入-絶単
「魚を食べているケッチャイ」

2.1.5. 主節における主要部名詞の役割

LH 関係節の形成において、主節内での主要部名詞の統語的役割はなんら影響を与えない。すなわち、主節内での主要部名詞の統語的役割が何であろうと、LH 関係節は絶対格でしか現われない。次の（17）は主要部名詞が主節において道具格を取る例、（18）は主要部名詞が与格を取る例である。

（17） q-ə-cvi kinuŋi wala-ta, [ʕamin ajɣəve
2単主・命令-挿入-切る 肉（絶単） ナイフ-具 間投 昨日

ʕojacek-a　java-lʕ-ə-n　qoja-nm-at-ə-k].
男-能　使う-分詞-挿入-絶単　トナカイ-殺す-逆受動-挿入-副動
「昨日、男がトナカイを殺すのに使ったナイフで肉を切りなさい」

(18) q-ə-jəl　ɣənin-Ø　wala-Ø　ʕojacek-ə-ŋ,
2単主･命令-挿入-与える　お前の-絶単　ナイフ-絶単　男-挿入-与
[ʕamin　ajɣəve　jet-ə-lʕ-ə-n　ŋelvəlʕ-ə-ŋqo].
間投　昨日　来る-挿入-分詞-挿入-絶単　家畜トナカイ群-挿入-奪
「昨日、家畜トナカイの群れから来た男にお前のナイフをやりなさい」

一方、コリャーク語と系統を同じくするチュクチ語では、LH 分詞（チュクチ語では -lʔ）が主節内での主要部名詞の統語的役割に呼応して、格変化する例が報告されている（Comrie 1981: 110）。多くの言語において、主要部名詞の主節での統語的役割が関係節形成の可能性や使用される特定の関係節構造の違いに対して影響を与えないと言われていることを考えると（Comrie 1981: 146）、チュクチ語のふるまいはむしろ特異であるといえる。例えば、(19) では主要部名詞が主節内で能格を取っているのに呼応して、分詞構文も能格で現われており、名詞として単独で現われる形式と関係節に、形態統語的なふるまいにおいて区別がないことを予想させる。

(19) 【チュクチ語】
en-aɣtat-kə-lʔ-a　qaa-k　ʔaaćek-a　vinretərkəninet
逆受動-追う-否定-分詞-能　トナカイ-処　若者-能　彼が-助ける-彼女たちを
ŋevəćqetti.
女たち-絶
「トナカイを追わない若者は女たちを手助けしている」　(Comrie 1981: 110)

次の (20) では、主要部名詞の方向格に呼応して、LH 分詞も方向格を取っている。

(20) 【チュクチ語】
iɣər　a-yoʔ-kə-lʔ-etə　enm-etə　mənəlqənmək.
今　否定-到達する-否定-分詞-向　山-向　させる-私たちに-行く
「さあ、(誰かが) 到達しなかった山に行きましょう」　(Comrie 1981: 110)

(19) (20) いずれの例でも、これまで見たコリャーク語の例とは異なり、LH 分詞が主要部名詞に先行しているが、これが LH 分詞への格標示に関与しているかどうかは断定しがたい。ちなみに 2.1.6. でみるように、コリャーク語における主要部名詞と LH の語順については、主要部前方型と主要部後方型のいずれもが観察されるが、いずれの場合にも LH 分詞は主節の主要部名詞の統語的役割に左右されることはない。

2.1.6.　主要部名詞と -lʕ 制限節の語順

コリャーク語で他動詞文に最も頻繁に現われる語順は、(21) のように SOV である。

(21) ɣəmnan qoja-ŋa t-ə-nm-ə-ɣəʕən-Ø
私(能) 家畜トナカイ-絶単 1単主-挿入-殺す-挿入-3単目-過去
「私は家畜トナカイを殺した」

修飾名詞句においても同様に、(22a)～(22d) のように修飾語－被修飾名詞の語順が一般的である。

(22) a. nəmejəŋqin-Ø jaja-ŋa
大きな-絶単 家-絶単 「(１つの)大きな家」
b. nəmejəŋqine-t jaja-t
大きな-絶双 家-絶双 「(２つの)大きな家」
c. nəmejəŋqine-k jaja-k
大きな-処 家-処 「大きな家に」

しかし、動詞は主語と目的語の人称・数と、形容詞は名詞とそれぞれ一致を示すために、語順はそれほど厳密ではない。例えば、次の (23) のような非修飾名詞－修飾語の語順も可能である。

(23) jaja-pel'l'aq-o nəppul'uqine-w
家-指小-絶複 小さい-絶複 「(複数の)小さい家」

主要部名詞を制限するという点では関係節も修飾名詞句も同じであり、語順についても両者は同様の傾向を示す。すなわち、関係節でも同様に主要部後方型のみならず主要部前方型が観察される (Ayatginina i Kurebito 2006: 13)[7]。

2.1.7. 制限節の範囲を指定する間投詞 ʕamin

これまで見てきた例からわかるように、筆者が調査で得た LH 関係節の例の多くには、間投詞の ʕamin が用いられている。ʕamin は、Moll (1960: 27) では г'амын (ʕamən) で現われ、ロシア語

7) コリャーク語では、関係節構文において、主節における動詞と名詞項の語順が主要部名詞の特定にかかわる場合があるようである。すなわち、主節が他動詞文の場合、主節の主語、目的語のいずれを制限しているのかがわからないことがある。インフォーマントによれば、この場合には、次の (a) (b) のように、動詞と主語の語順により主要部名詞がどれかが決まると言う。

a. k-ə-ʕeŋew-ŋ-ə-nin-Ø en'pici-te kəmiŋ-ə-n,
現在-挿入-呼ぶ-現在-挿入-3単目-3単主 父-能 息子-挿入-絶単
[ʕamin ajɣəve jet-ə-lʕ-ə-n ŋelvəlʕ-ə-ŋqo].
間投 昨日 来る-挿入-分詞-挿入-絶単 家畜トナカイの群れ-挿入-奪
「昨日、家畜トナカイの群れから来た父が息子を呼んでいる」
b. en'pici-te k-ə-ʕeŋew-ŋ-ə-nin-Ø kəmiŋ-ə-n,
父-能 現在-挿入-呼ぶ-現在-挿入-3単目-3単主 息子-挿入-絶単
[ʕamin ajɣəve jet-ə-lʕ-ə-n ŋelvəlʕ-ə-ŋqo].
間投 昨日 来る-挿入-分詞-挿入-絶単 家畜トナカイの群れ-挿入-奪
「父が昨日、家畜トナカイの群れから来た息子を呼んでいる」

では как бы「なんとかして、どうしたら」と訳されているが、その品詞性や具体的な意味・機能についての記述は管見のかぎり見られない。

しかし、ʕamin は実際のコリャーク語の発話ではきわめて頻出度が高い。その機能のひとつとして、話者が聞き手にすでに既知である陳述内容を聞き手に想起させるというモダリティ標示があげられる。たとえば、次の（24）の会話例を見られたい。

（24）A: unmək　　ɣəcci　　ku-ɣətʕet-ə-ŋ-Ø.
とても　　お前(絶)　　現在-空腹である-挿入-現在-2単主
「君はとてもお腹がすいているねえ」
B: məjew　　ʕamin　　unm-ə-jəqmitiw　　t-ewji-k-Ø.
なぜならば　　ほら　　とても-挿入-朝に　　1単主-食べる-1単主-過去
「なぜなら、ほら、朝早く食べたでしょ」

次の（25）も、A の質問に対し B が A に既知の事実を想起させていると解釈されるが、LH 分詞になっており、A の質問の「どの橇」の「橇」を制限していることに注意したい。

（25）A: meŋin-Ø　　ujetik-Ø?
どの-絶単　　橇-絶単
「どの橇？」
B: ʕamin　　tata-na-k　　tejk-ə-lʕ-ə-n.
ほら　　お父さん-有生-能　　作る-挿入-分詞-挿入-絶単
「ほら、お父さんが作ったのだよ」

言い換えれば、ʕamin には、話し手の発話のテーマとなる事柄・事態の指示範囲を限定する機能があるともいえる。そして、その機能によって、関係節において主要部名詞を指示する範囲がどこからであるかを明示するのを可能にしているとも考えられる[8]。とりわけ、主要部名詞と制限節の間に現れる副詞や斜格名詞などは、主節に属するのか制限節に属するのかがあいまいな場合が多いために、その前に ʕamin を置くことによって、それが制限節に属するものであることが明示される。

たとえば、次の（26）の例では、ʕamin が ajɣəve「昨日」の前に挿入されることで、「昨日」が主節に入るのか（すなわち、「昨日、牧夫が見た」）、制限節に入るのか（すなわち、「昨日、群れから逃げた」）という意味解釈におけるあいまいさが回避される。

（26）qojaɣənn'etəlʕ-a　　ləʕo-nin-Ø-Ø　　wenqoj-Ø,
トナカイ牧民-能　　見る-3単目-3単主-過去　　雌トナカイ-絶単
[ʕamin　　ajɣəve　　ŋelvəlʕ-ə-ŋqo　　ɣəntev-ə-lʕ-ə-n].
間投　　昨日　　群れ-挿入-奪　　逃げる-挿入-分詞-挿入-絶単
「トナカイ牧民は、昨日、群れから逃げた雌トナカイを見た」

8）加藤昌彦（2001: 295）がポー・カレン語（東部方言）において、任意に現れる関係節を導く助辞 lə- を、「構造の明確化」の標識であるとしていることを想起させる。

ʕamin はまた、qun あるいは ŋən というモダリティを表わす別の間投詞（Zhukova 1972: 289–290）とも共起する。インフォーマントによれば、qun は話し手が聞き手に発話の内容に対して注意を促すニュアンスを表わす際に、ŋən は話し手が発話内容を再確認しているニュアンスを表わす際に用いられるという。

(27) Qeccaj-Ø, ʕamin {qun / ŋən} ɣəmək əccaŋjoŋ va-lʕ-ə-n,
ケッチャイ-絶単 間投 間投 間投 私に 年下の ある-分詞-挿入-絶単
ujŋe tite e-peŋʕejvet-ke.
ない いつ 否定-疲れる-否定
「{私よりほら、年下のケッチャイは／確かに私より年下のケッチャイは}、決して疲れない」

2.2. 未来時制を表わす JQ 関係節

以上、現在・過去時制を表わす LH 関係節について見てきたが、以下では、未来時制を表わす JQ 関係節について見る。コリャーク語には、名詞語幹に接続し「〜の予定のもの」を表わす接尾辞 -lqəl がある。

(28) cawatəlqəl「投げ縄の材料」 pəʕatʕolqəl「干し肉用の肉」
kukelqəl「鍋の原材料」 icʕəlqəl「毛皮上着の材料」

一方、Zhukova（1972: 86）によれば、-lqəl の直前に同様の意味を表わす接尾辞 -jo が付加された -jo-lqəl は動詞語幹について「〜する予定のもの」の意味を表わす。(29) で見るように、通常、他動詞語幹に接続して動作対象を表わす。

(29) təmjolqəl「殺す予定の動物」 tajkəjolqəl「やるべき課題、作るべき物」
ojejolqəl「燃やす予定のもの、燃料」 pelajolqəl「残す予定のもの」

これらは、単独で名詞として用いることができる一方で、動詞語幹に接続して主要部名詞の指示対象を制限する制限節となり、未来を表わす JQ 関係節を形成する。主要部名詞が制限節の自動詞主語と他動詞目的語を表わす能格型を示し、主節の主要部名詞の統語的役割にかかわりなく常に絶対格で現われる点、制限節に主要部名詞の指示範囲を限定する ʕamin を任意に伴う点など、表わす時制の違いを除けば、LH 分詞と同じふるまいをする。すなわち、-jolqəl と -lʕ は、関係節形成において時制標示を分担しながら相補分布的に機能しているといえる。次の例（30）は主要部名詞が制限節の自動詞主語に相当するもの、(31) は他動詞目的語に相当する例である。

(30) qajəkmiŋ-ə-n, [ʕamin mitiw lajv-ə-jolqəl tənop-etəŋ]
少年-挿入-絶単 間投 明日 行く-挿入-分詞 山-向
「明日、山に行くことになっている少年」

(31) kalikal, [ʕamin ɣəmnan akmec-colqəl[9]-Ø]
本(絶単) 間投 私(能) 買う-分詞-絶単
「私が買う予定の本」

ところで、上述のように -jolqəl は -jo と -lqəl に形態素分析できると考えられるが、このうち、-jo は Zhukova (1972: 85) によれば、「他動詞語幹について行為の実現のために予定されている対象、あるいは行為のプロセスにおいて得られる対象」、すなわち、動作対象を表わす。

(32) tajkəjon「仕事」 ← tejkək「作る」
joʔəjon「目的」 ← joʔək「実現する」
təmjon「屠殺する対象」 ← təmək「屠殺する」
jənŋawjon「苗」 ← jənŋavək「植物を育てる」
matajon「嫁」 ← matak「嫁に取る」

ただし、それでは未来を表わす JQ 分詞の -jo の定義としては不適当である。なぜならば、上例(30)のように、-jolqəl は自動詞語幹にも接続し自動詞主語にあたる主要部名詞を制限することもできるからである。したがって、ここではとりあえず -jolqəl の -jo は、動作対象を表わす上述の -jo とは、別の接尾辞と考えておいた方がよいであろう[10]。

3. 間接目的語の関係節化

接近可能性階層によれば、主語、直接目的語の次に関係節化されやすい主要部名詞は、間接目的語である。コリャーク語については、筆者の調査では次例 (33) (34) が確認されている。

(33) ?Qeccaj-Ø, [ʕamin qun ajɣəve ɣəmnan
ケッチャイ-絶単 間投 間投 昨日 私(能)
t-ə-jəl-ə-n-Ø cenen-qoj-Ø], jaqam
1単主-挿入-与える-挿入-3単目-過去 自分の-家畜トナカイ-絶単 すぐに
jəqmitiw jamk-etəŋ ʕeqev-i-Ø.
朝に 隣のブリガード-向 出発する-過去-3単主
「私が自分のトナカイを与えたケッチャイは朝、隣のブリガードに出かけた」

---

9) akmeccolqəl は、{ekmit} と {-jolqəl} の形態素境界の tj が相互同化により cc に交替した形。また、強形態素の {-jolqəl} に母音調和により弱形態素の動詞語幹 {ekmit} が同化し、強形態素 akmec になっていることにも注意されたい（コリャーク語を含むチュクチ・カムチャツカ語族の母音調和については呉人 [1999: 49-64] を参照のこと)。

10) ちなみに、-jo のつく名詞で他動詞語幹についた (32) の例とは別に、自動詞語幹についた例として awjejon「食べ物」← ewjik「食べる」が筆者の調査で確認されている。ewjik は自動詞で、動作主を絶対格で、動作対象を道具格で表わす。
ただし、他動詞の jukkə からは JQ 分詞が形成されない。自動詞の ewjik からだけ JQ 分詞が形成される理由は明らかではないが、-jo は文法上の他動詞目的語を表わすというよりは、むしろ意味役割上の動作対象を表わすと考えるべきかもしれない。

(34) ʔqajəkmiŋ-ə-n, [ʕamin qun ɣəmnan ajɣəven'ŋ-a
少年-挿入-絶単 間投 間投 私(能) 晩-具
t-ə-ko-tv-ə-ŋ-ə-n n-eŋinm-ə-qin-Ø
1単主-挿入-現在-語る-挿入-現在-挿入-3単目 形容-面白い-挿入-形容-絶単
ləmŋəl'-Ø], kətawət unmək acacɣ-ə-lqev-e-Ø.
物語-絶単 突然 とても 笑う-挿入-始動-過去-3単主
「私が晩に面白い物語を話して聞かせた少年は、突然、大笑いし出した」

ただし、これらを関係節構文と見るべきかどうかは判断が難しいところである。これらの例には間投詞のʕaminはあっても、後述するように、関係副詞や関係代名詞を介さないまま定形動詞の節が導かれている点、また、制限節内で間接目的語に相当する主要部名詞以外のみならず直接目的語が絶対格をとっている点など、問題があるからである。ちなみに、インフォーマントは、これらを作文した後、より自然な発話としてそれぞれ(33')(34')のような重文に言い換え、こちらの方が自然であるとしている。

(33') Qeccaj-ə-na-ŋ ɣəmnan ajɣəve
ケッチャイ-挿入-有生-与 私(能) 昨日
t-ə-jəl-ə-n-Ø cenen-qoj -Ø to
1単主-挿入-与える-挿入-3単目-過去 自分の-家畜トナカイ-絶単 そして
ənno jaqam jamka-jtəŋ ʕeqev-i-Ø.
彼(絶単) すぐに 隣のブリガード-向 出発する-過去-3単主
「私はケッチャイに自分のトナカイを与えた。すると、彼はすぐに隣のブリガードに出かけて行った」

(34') qajəkmeŋ-ə-ŋ ɣəmnan ajɣəven'ŋ-a
少年-挿入-与 私(能) 晩-具
t-ə-ko-tv-ə-ŋ-ə-n
1単主-挿入-現在-語る-挿入-現在-挿入-3単目
n-eŋinm-ə-qin-Ø ləmŋəl'-Ø, to unmək acacɣ-o
形容-面白い-挿入-形容-絶単 物語-絶単 そして とても 笑い-様態
ləŋ-nin-Ø-Ø.
みなす-3単目-3単主-過去
「私は晩に少年に面白い話を話してきかせた。すると、少年は大笑いした」

4. 関係副詞による斜格名詞の関係節化

既述のとおり、LH／JQ関係節では自動詞主語と他動詞目的語という接近可能性階層の上位に位置する名詞しか主要部名詞になることができない。しかし、このように制約の強いLH／JQ関係節を補完する方法がある。それは、斜格で現われる場所や時を表わす名詞を、疑問代名詞に由来する関係副詞を介して主要部にたて、関係節を作る方法である。このような関係副詞は、これまで見てきたLH／JQ関係節よりも関係節化されている位置を示す標識がより明示的である。すなわ

ち、このことは、2.1.3. でも見たように、ある言語が、関係節の形成に関して、明示的と非明示的の２つの方法を持っている場合には、より明示的なタイプは階層の下の方で、非明示的なタイプは階層の上の方で用いられるという一般化（Comrie 1981: 156）にも合致する。言い換えれば、コリャーク語において、LH ／ JQ 関係節と関係副詞による関係節の共存は恣意的でなく、機能的な相補分布性を反映したものなのである。なお、関係副詞をともなう関係節では、動詞は主節同様に定形動詞で現われる。

4.1.　場所を表わす関係副詞

コリャーク語の場所を表わす関係副詞は、存在や行為の場所、起点、方向に対応して、疑問代名詞に由来する異なる形式をもつ。すなわち、存在・行為の場所を表わす miŋki「どこに、どこで」、起点を表わす meŋqo「どこから」[11]、方向を表わす miŋkəje「どこへ」の３形式である。次の(35)～(37) はそれぞれが疑問代名詞として用いられている例である。miŋki に対する答えとしては場所格、meŋqo に対する答えとしては奪格、miŋkəje に対する答えとしては方向格が用いられていることに注意されたい。

(35)　A:　miŋki　　jumkev-ə-n-Ø-Ø　　kalejocɣ-ə-n?
　　どこに　　置く-挿入-3単目-2単主-過去　　カバン-挿入-絶単
　　「あなたはどこにカバンを置きましたか？」
　　B:　t-ə-numkev-ə-n-Ø　　ineŋ-ə-k.
　　1単主-挿入-置く-挿入-3単目-過去　　貨物用橇-挿入-処
　　「私は貨物用橇に置きました」

(36)　A:　meŋqo　　jal-la-j-Ø　　kalicitəlʕ-o?
　　どこから　　来る-複-過去-3主　　学生-絶複
　　「学生たちはどこから来ましたか？」
　　B:　əccu　　jal-la-j-Ø　　Magadana-ŋqo.
　　彼ら（絶）　　来る-複-過去-3主　　マガダン-奪
　　「彼らはマガダンから来ました」

(37)　A:　miŋkəje　　ənno　　qətt-i-Ø?
　　どこへ　　彼（絶）　　行く-過去-3単主
　　「彼はどこへ行きましたか？」
　　B:　ənno　　qətt-i-Ø　　wajam-etəŋ.
　　彼（絶）　　行く-過去-3単主　　川-向
　　「彼は川に行きました」

次は、上記の疑問代名詞が関係副詞として関係節を形成している例である。(39) の例は日本語では的確に訳せないが、主要部名詞である wejem「川」は、制限節の中では奪格で現れるべきものであることに注意されたい。

11)　meŋqo「どこから」の -ŋqo は、奪格を表わす。例文 (36) の答えの文を見られたい。

(38) en'pic-Ø qətt-i-Ø wajam-tajn-etəŋ, [miŋki ʕamin
父-絶単 行く-過去-3単主 川-岸-向 関係副詞(処) 間投
ajɣəve ɣəcci k-ejeʕo-ŋ-Ø].
昨日 お前(絶) 現在-釣りする-現在-2単主
「父は昨日お前が釣りをしていた川岸の方に出かけた」

(39) wejem-Ø, [ʕamin meŋqo ano-k ŋellə
川-絶単 間投 関係副詞(奪) 春-処 群れ-絶単
mət-ajtala-n-Ø] wotqo əjava-k ko-tva-ŋ-Ø.
1複主-追ってくる-3単目-過去 ここから 遠い所-処 現在-いる-現在-3単主
「私たちが春、トナカイの群れを追ってきた川はここから遠い」

(40) ŋanen wejem-ə-k, [miŋkəje ajɣəve ɣəmmo
あの(絶) 川-挿入-処 関係副詞(向) 昨日 私(絶)
t-ə-lqət-ə-k-Ø], amalvaŋ va-lʕ-o ənno.
1単主-挿入-行く-挿入-1単主-過去 いろいろ ある-分詞-絶複 魚-絶複
「昨日、私が行ったあの川にはいろいろな魚がいる」

4.2. 時を表わす関係副詞

時を表わす名詞が主要部になる場合、疑問代名詞のtite「いつ」に由来する関係副詞が用いられる。titeには場所の関係副詞のような格による変化形はない。まずは、(41)にtiteが疑問代名詞として用いられている例をあげる。

(41) A: Qeccaj-Ø tite je-jet-ə-ŋ-Ø nota-ŋqo?
ケッチャイ-絶単 いつ 未来-来る-挿入-未来-3単主 ツンドラ-奪
「ケッチャイはいつツンドラから来ますか？」
B: amu mitiw je-jet-ə-ŋ-Ø.
多分 明日 未来-来る-挿入-未来-3単主
「多分、明日彼は来ます」

次の(42)は、titeが関係副詞として用いられた例である。

(42) ŋanen ɣivi-k, [tite Kol'a-Ø ɣe-pl'ətko-lin
その(絶) 年-処 関係副詞 コーリャ-絶単 過去-終わる-3単主
kalicit-ə-k], Jawjek-Ø qətt-i-Ø Magadan-etəŋ
学ぶ-挿入-不定 ジャウジェク-絶単 行く-過去-3単主 マガダン-方向
vetatənv-ə-ŋ.
働き場所-挿入-与
「コーリャが卒業したその年に、ジャウジェクはマガダンに働きに行った」

5. 所有者の関係節化

所有者の関係節化は、疑問代名詞 mikən「誰の」に由来する関係代名詞によりなされる例が調査で確認されている。

(43) ɣəmnan　ɣe-jɣule-lin-Ø　el'ʔa-Ø,　[ʔamin　qun　mikən
私(能)　過去-知る-3単目-3単主　女-絶単　間投　間投　誰の
ŋavakək-Ø　malawja-k　ko-vetat-ə-ŋ-Ø　doktor-o].
娘-絶単　病院-処　現在-働く-挿入-現在-3単主　医者-様態
「私は娘が病院で医者として働いている女性を知っている」

(44) ʔojacek-o,　[ʔamin　ŋən　mikən　ɣe-vu-linew-Ø
牧夫-絶複　間投　間投　誰の　過去-繋ぐ-3複目-3複主
ɣakaŋje-w],　mitiw　j-ə-ʔaqaw-la-ŋ　nota-jtəŋ.
橇用トナカイ-絶複　明日　未来-挿入-出かける-複-未来-3主　ツンドラ-向
「自分の橇用トナカイを繋いだ牧夫は、明日ツンドラに出かけるだろう」

この2例のうち、(43) については、次のように関係代名詞の代わりに人称代名詞の所有形による表現もえられたが、これは単なる接合である可能性もあり、代名詞残存型の関係節構文といえるかどうかは疑問である。

(43') ɣəmnan　ɣe-jɣule-lin-Ø　el'ʔa-Ø,　[ʔamin　ŋən　ənin
私(能)　過去-知る-3単目-3単主　女-絶単　間投　間投　彼女の
ŋavakək-Ø　malawja-k　ko-vetat-ə-ŋ-Ø　doktor-o].
娘-絶単　病院-処　現在-働く-挿入-現在-3単主　医者-様態
「私は女性を知っている、その娘は病院で医者として働いている」

6. まとめ

以下では、本稿の考察で明らかになった点と、検討が十分にいき届かず今後の課題として残された点について総括する。まず、明らかになった点は以下のとおりである。

① コリャーク語における関係節は、分詞ならびに関係詞（関係代名詞・関係副詞）によって形成される。両者の共存は恣意的ではなく、主要部名詞の接近可能性階層にしたがいその機能を補完し合いながら、相補分布的に形成される。すなわち、

1）主要部名詞が階層の上位に位置する自動詞主語および他動詞目的語の場合には、過去・現在を表わす分詞形成接尾辞 -lʔ、未来を表わす分詞形成接尾辞 -jolqəl によって関係節が形成される（ただし、他動詞目的語は関係節化できない）。

2）階層のより低い位置にある斜格名詞や所有者名詞は、関係副詞・関係代名詞によって表わされる（ただし、最下位に位置する比較対象の関係節化はできない）。

3）このような分布は、主要部名詞が接近可能性階層の上位であればあるほど、役割の明示度が

低くなるという一般化にも合致する。

一方、今後検討すべき課題として残された点は以下のとおりである。

② 間接目的語の関係節化は本当に可能か否か？

Keenan and Comrie（1977: 66）の階層制約に従うならば、主語や直接目的語の次に位置する間接目的語の項を飛び越して、それより下位の名詞を関係節化できない。したがって、斜格名詞が関係詞によって関係節化できるコリャーク語では、間接目的語も関係節化できるはずである。しかし、調査で得られた例では、間投詞の ʔamin のみを介して定形動詞に連なっており、これを関係節と呼ぶべきかどうか疑問が残る。また、もし仮に間接目的語が関係節化できないとしたら、それはなぜかを考察する必要がある。

③ 所有者名詞の関係節化に代名詞残存型が認められるか否か？

所有者名詞の関係節化において、関係節に人称代名詞の所有形が残留しているとも解釈できる例が見られるが、これもまた間投詞 ʔamin のみを介して定形動詞に連なっている例であり、代名詞残存型とみなすのは難しいように思われる。

以下、コリャーク語の関係節化と接近可能性階層との対応を表にまとめておく。

ところで、コリャーク語と同系のアリュートル語でも、関係節の形成に分詞による非定形動詞構文と、関係代名詞を介した定形動詞構文があることが報告されている（Kibrik, Kodzasov and Muravyova 2004: 327–332）。関係代名詞・関係副詞として用いられるのは、英語の which に相当する meŋin と、where に相当する maŋki などである。ただし、その分布はコリャーク語と異なっている。すなわち、（a）分詞構文、（b）関係代名詞・副詞＋分詞構文、（c）関係代名詞・副詞＋定形動詞構文の 3 つのタイプである。（a）と（c）のタイプはコリャーク語でも認められる。しかし、（b）の分詞と関係副詞・代名詞の共起は、コリャーク語が示す分詞と関係副詞・代名詞の相補分布に照らしても、接近可能性階層と関係節を形成するストラテジーとの相関関係に照らしても、不自然な感をまぬがれない。これが何に起因するかは、今後、両言語の関係節を詳細に比較し明らかにしていかなければならない。

さらに、語族を越えた関係節の比較対照も重要である。ここでは特に、分詞関係節に触れる。筆者は、2.1.3. で、同じく分詞を用いながら、主語しか関係節化できないドイツ語、自動詞主語と他動詞目的語を関係節化するコリャーク語の例をあげ、それぞれの言語の形態的・統語的事情により接近可能性に相違が現れることを示唆した。ただし、これについては、さらに広範なデータに照らした類型論的考察が必要である。例えば、ツングース系のエヴェン語（Malchukov 1995: 34–35）

表：コリャーク語の関係節化ストラテジーと接近可能性階層

上（階層）下 ↕ 低（明示度）高		LH / JQ 分詞	関係副詞	関係代名詞
	自動詞主語	○	×	×
	他動詞主語	×	×	×
	直接目的語	○	×	×
	間接目的語	?		
	斜格名詞	×	○	×
	所有者名詞	×	×	○
	比較対象	×	×	×

では、分詞によって主語、目的語、斜格名詞、所有者名詞など接近可能性階層の上位から下位までの関係節化が可能である[12]。また、同系のナーナイ語ではいわゆる「外の関係」の名詞句までも関係節化されることが報告されている（風間 2006: 95–108）。さらに、日本語では、動詞の終止形と同形式の連体形が直接、名詞を修飾するため、分詞形と同レベルで比較することは問題かもしれないが、やはり、接近階層性の上位から下位まで多様な主要部名詞のみならず、「外の関係」を表わす名詞句まで関係節化することができる。この要因について、加藤重広（2003: 210）が日本語では名詞における格標示が統語的に義務的ではないことと関連づけて論じているのは示唆的である。このように、より多様なタイプの分詞制限節の比較分析を待って初めて、分詞の形態統語的特徴と関係節化を許す主要部名詞との相関性に関する一般化が可能になると考えられる。

略語

挿入＝挿入母音	1=1 人称	2 ＝ 2 人称	3 ＝ 3 人称	主＝主語
目＝目的語	単＝単数	複＝複数	絶＝絶対格	能＝能格
処＝処格	具＝道具格	与＝与格	奪＝奪格	向＝方向
沿＝沿格	様態＝様態格	間投＝間投詞	副動＝副動詞	形容＝形容詞
始動＝始動相				

参考文献

風間伸次郎

2006 「ナーナイ語の形動詞について」敦賀陽一郎・三宅登之・川口裕司・高垣敏博編『言語情報学研究報告　言語研究におけるコーパス分析と理論の接点』11: 95–108（21 世紀 COE プログラム「言語運用を基盤とする言語情報学拠点」）、東京外国語大学大学院地域文化研究科。

加藤　昌彦

2001 「ポー・カレン語（東部方言）の関係節」『東京大学言語学論集』20: 275–300.

加藤　重広

2003 『日本語修飾構造の語用論的研究』（ひつじ研究叢書）、ひつじ書房。

呉人　　恵

1999 「チュクチ・カムチャツカ語族の母音調和に関する一考察」『富山大学人文学部紀要』30: 49–64.

2001a 「コリャーク語の名詞句階層と格・数標示」『アジア・アフリカ言語文化研究』62: 107–125、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所。

2001b 「コリャーク語の出名動詞と名詞抱合」津曲敏郎編『環北太平洋の言語』7: 101–124（「環太平洋の言語」成果報告書 A2–002）、大阪学院大学情報学部。

永山ゆかり

2004 「アリュートル語の所有・存在を表わす形式について」津曲敏郎編『環北太平洋の言語』11: 45–78、北海道大学大学院文学研究科。

Ayatginina, Tat'yana N. i Megumi Kurebito

2006 *Koryaki-kochevniki: ix obychai, obryady i skazki*（平成 17 年度科学研究費補助金基盤研究 B「北方諸言語の類型的比較研究」［代表：津曲敏郎、課題番号 15320047］研究成果報告書）、北海道大学大学院文学研究科。

12)　ただし、分詞は主要部名詞に応じて格変化するわけではなく、完了形で現われ、主語以外の名詞を制限する場合にはその後に主語の人称標示がなされる。

Bogoras, Waldemar
1922 Chukchee, In: F. Boas (ed.) *Handbook of American Indian Languages*. Part 2, *Bureau of American Ethnology*, *Bulletin* 40: 631-903, Washington D.C.: Smithsonian Institution.
Comrie, Bernard
1981 *Language Universals and Linguistic Typology*, Chicago: University of Chicago Press.
Keenan, Edward L.
1985 Relative Clauses, In T. Shopen (ed.), *Language Typology and Syntactic Description* Ⅱ, *Complex Constructions*, 141-170, Cambridge: Cambridge University Press.
Keenan, Edward L. and Bernard Comrie
1977 Noun Phrase Accessibility and Universal Grammar, *Linguistic Inquiry* 8-1: 63-99.
1979 Data on the Noun Phrase Accessibility Hierarchy, *Language* 55-2: 333-351.
Kibrik, Aleksandr E., Sandro V. Kodzasov, and Irina A. Muravyova
2004 *Language and Folklore of the Alutor People* (EPLR Publication Series A2-042), Suita: Faculty of Informatics, Osaka Gakuin University.
Kurebito, Megumi
2001 Noun Incorporation in Koryak, In: O. Miyaoka and F. Endo (eds.), *Languages of the North Pacific Rim* 6: 29-58 (ELPR Publication Series A2-001), Suita: Faculty of Informatics, Osaka Gakuin University.
Malchukov, Andrei L.
1995 *Even* (Languages of the World/ Materials 12), München/Newcastle: LINCOM EUROPA.
Moll, Tat'yana A.
1960 *Koryako-russkij slovar'*, Leningrad: Gosdarstvennoe uchebno-pedagogicheskoe izdatel'stvo.
Zhukova, Alevtina N.
1972 *Grammatika koryakskogo yazyka*, Leningrad: Izdatel'stvo Nauka.

Complementary Formation of Koryak Relative Clauses : Participial and Finite Subordinate Strategies

Megumi KUREBITO
Faculty of Humanities ,University of Toyama

This paper attempts to describe the complementary nature of Koryak relative clauses (RCs) which is manifested in participial and finite subordinate strategies.

Koryak, which belongs to the Chukchi-Kamchatkan language family, employs two main strategies of RC formation, that is, the participial strategy and the finite subordinate clause strategy. They differ from each other with regard to NP positions they can relativize. Thus, the participial strategy can relativize intransitive subject or transitive object of restrictive clauses, whereas the finite subordinate strategy functions to relativize oblique case NPs and possessor nouns. In other words, coexistence of these two strategies is not random, but reflects their complementary distribution in terms of the Accessibility Hierarchy posited in the universal RC typology.